

2 「適切に応答する力」を高める指導の工夫をしましょう

教育課程実施状況調査で、「英語での問いかけに応答する」というねらいで出題された問題について、本県の通過率が低かったものに、次のようなものがありました。

英語の話しかけを聞き、それに対する応答として最も適切なものを1～4の中から一つ選んで、その番号を の中に書きなさい。話しかけは2回繰り返して言います。

(1) <学校で友達が>

- | | | | |
|---|----------------------|-------|------|
| 1 | I am sick now. | 4.1% | |
| 2 | I am OK now. | 11.2% | |
| 3 | I was sick in bed. | 30.7% | (正答) |
| 4 | I am playing tennis. | 53.7% | |

<Script>

M: I didn't see you at tennis practice yesterday. What were you doing?

くり返します。

.....

(2) <家でお母さんが>

- | | | | |
|---|---------------|-------|------|
| 1 | Father is. | 24.1% | |
| 2 | Mother is. | 12.1% | |
| 3 | All right. | 44.3% | (正答) |
| 4 | That's right. | 19.1% | |

<Script>

M: Father is cooking in the kitchen. Will you help him?

くり返します。

.....

それぞれの問題の通過率が低かった原因として、読まれた文の意味を理解できなかったということとともに、次のようなことが考えられます。

(1)では、4の I am playing tennis. という文を正解として選んでしまった生徒の割合は、5割以上となっています。これは、質問文が What were you doing? という進行形を用いたものであったため、その言語形式に合うような選択肢を選んでしまった生徒が多かったと思われます。(2)では、4の That's right. を選んだ生徒の割合は、約2割となっています。All right. と That's right. は表現が似ており、生徒は混同してしまったのではないかと考えられます。

それでは、生徒がそのような誤りをしない力を身に付けたり、適切に応答すること

ができる力を高めるためには、どのような指導をしていけばよいでしょうか。ここでは、二つのポイントを示します。

言語形式にとらわれすぎないようにするために

授業中の言語活動について、言語材料についての知識・理解を深める活動(「言語材料についての理解や練習を図る活動」)だけではなく、考えや気持ちを伝え合う活動(「コミュニケーションを図る活動」)もバランスよく行い、それらを通して、相手の意図を理解する力を高める。

「言語材料についての理解や練習を図る活動」は、まさに言語形式に慣れさせるために行う活動です。そのため、授業で行う活動がそういった活動に終始してしまうと、生徒は言語形式にのみ意識が向いてしまいます。もちろん、正しい言語形式を身に付けることは大切ですが、それが身に付けばコミュニケーションを図れるというわけではありません。

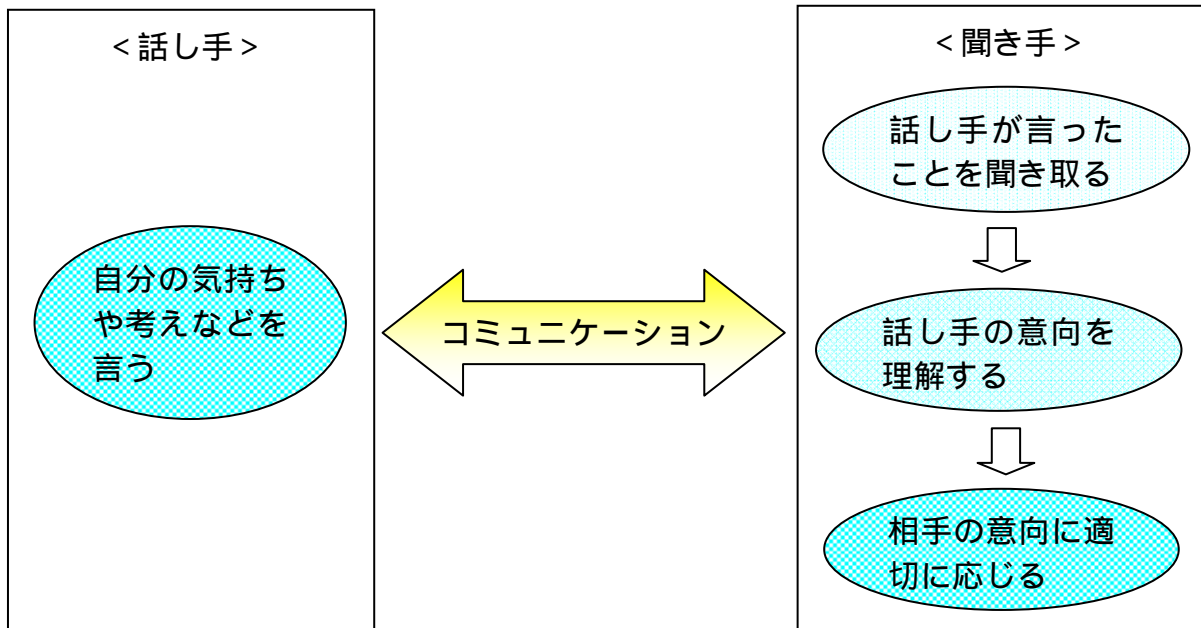
そこで、「コミュニケーションを図る活動」でメッセージのやりとりを通して、その時間で学んだ文法事項や既習の表現を使わせるようにします。ここでは、相手と意思疎通を図ることが重要となるので、相手の意向などに応じて、適切な表現を選択して使用することになります。適切な表現とは、ときには、定型的な表現とは異なる場合もあるので、このような活動を通して、生徒に英語をコミュニケーションの手段として使う経験を積ませていくことが大切です。

似た表現を混同しないようにするために

知識としてだけでなく、教師とのインタラクションや言語活動などを通して、実際に英語を使うことを通して身に付くようにする。

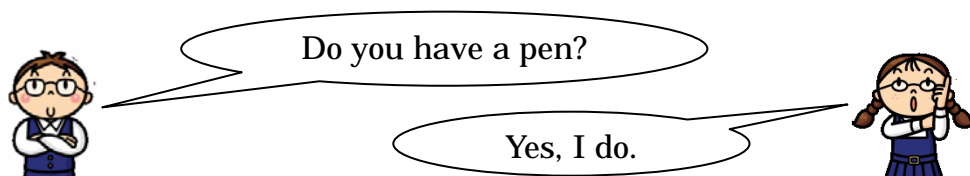
場面設定した言語活動の中で、適切な表現を用いるようにさせます。意味のある場面で使うことによって、表現を単なる知識として記憶するのではなく、より現実感を伴って定着を図ることができます。

ここで、実際に英語を使ってコミュニケーションを図る場面を考えてみましょう。まず話し手が自分の気持ちや考えを言います。聞き手は、まず、話し手が言った文の意味を理解します。さらに、その文の内容から相手の意向を理解します。そして、それらを理解するだけでなく、言葉や行動などで「相手に適切に応じる」ことでコミュニケーションは成立します。

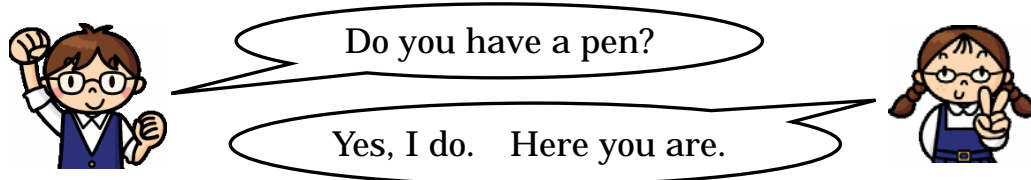


いずれにせよ、教師は、日常の授業を通して生徒の「適切に応答する力」も高めていかなければなりません。

ここで、英語使用の一場面を例に取り、考えてみましょう。次の対話例を見てください。相手に“Do you have a pen?”と尋ねられたとき、もし自分がペンを持っていれば“Yes, I do.”と答えます。これは、文法的には正しい応答です。



しかし、コミュニケーションという点からは、このような応答では十分とは言えない場合が多いのではないのでしょうか。なぜなら、日常生活においてこのような質問をするのは、相手がペンを所有しているかどうかに興味があるというより、ペンを持っていたら貸してもらいたい、という意図があるからです。ですから、聞き手はその意図を理解し、下の対話例のような受け答えをして、ペンを貸すことで適切な応答となり、コミュニケーションが成立したことになります。



このような、相手に「適切に応答する力」を生徒に身に付けさせるためには、教師が様々な言語活動を設定し、実際に生徒に英語を使わせることが大切です。そうすることで生徒は、単なる知識としてではない、「使える英語」を身に付けていくことができるのです。